

読書

「板垣死すとも自由は死せず」の名言で知られる事件が起きたのは一八八二(明治十五)年四月六日。場所は厚見郡富茂登(ふもと)村の神道中教院。現在の岐阜市大宮町岐阜公園地内である。自由民権運動の旗手、

が、胸部、顔面、両手を短刀で切り付けられ、おびたしい出血を見た板垣が発したとされる言葉が冒頭のものである。

事件第一報は同月八日の東京日日新聞に掲載され、その後数日にわたり続報が出ている(「新聞

県図書館に行こう

こんな情報(情報)が待っている

板垣退助は、前年結成された自由党の総理として東海遊説中、金華山ろくの中教院で開かれた懇親会に出席、帰ろうとするところを愛知県士族で小学校教員の相原尚駈(な おぶみ)に襲われた。致命傷には至らなかった

集成明治編年史第五巻(より)。冊子体の出版物は早いものは同月中旬ごろから発行され始め、県図書館が所蔵しているものでは八冊の小冊子が同月中の発行。中でも「板垣君岐阜騒動始末」は事件からわずか二週間足ら

「自由」印象付ける契機 板垣退助の遭難



「板垣君岐阜騒動始末」の表紙

ずの同月十七日に発行の速報性が薄れ、「婦女子」に読易(よみやす)かる事件から四年後の八六年発行の「板垣君近世記」は総ルビ付き。演説場面、刺客に襲われる場面、裁判場面など見開きの挿絵が七枚。次第に

速報性が薄れ、「婦女子」に読易(よみやす)かる事件から四年後の八六年発行の「板垣君近世記」は総ルビ付き。演説場面、刺客に襲われる場面、裁判場面など見開きの挿絵が七枚。次第に

「自由」とい。冒頭の名言は、板垣自身が発した「自由党史」(九六年刊)によるもの。これら出版物では「板垣は死すとも自由は亡びませぬぞ」「假令(たと

とも自由は滅する事あらじ」と、細部は違っている。同じ内容を伝えており、この事件が「自由」とい言葉が大衆に印象付ける大きなエピソードとなったことを物語っている。